

故国を後にして(7)

子どもたちの詩 (二)

モーレンキャンプふゆこ

アムステルダム補習校一年生、初めての詩

の授業が又やってきた。「詩って何だろう？」とまず、ふゆこ先生。手がひとつ、ぱっと上がる。「先生、シってナマエのこと？」そうか、その次元か。「ううん、ナマエのことじゃないンだけどなあ。」

何をどう説明したかわからない。(くわしくは「子どもたちの詩(一)」を参照90巻10号)

説明が終わって、とにかく作ってみようとい

うことになる。

「たとえばね、お馬さんが走るでしょ。お馬さんはどんな風に走る？」誰れも何も言わない。外国で育つ子どもたちの弱点のひとつは、日本語の擬音である。「『バカバカ』でしよう？」シーン。そうか、その次元か。「お馬さんはね、日本では、パカパカって走るのよ。バカバカバカ」

「バカバカバカ」最前列のヨウスケ君の辺

りから、すかさず小さなつぶやきがきこえた。大笑いになって、詩がひとつ。

わたしのお馬 せんせい

わたしのお馬は

おバカさん

バカバカバカと 走ります。

雨が降っていたのよ

「ね、いいでしょ。おもしろいでしょ。」

「ゼーんぜん。」きょとんとした顔 顔

意気ショウウチンのふゆこ先生、気をとりなおして、詩と漢字を、いっぺんに教えちゃおうなんて欲を出す。

中 先生

長い四かくの まん中に

小さなねずみが 二ひきいた

けんかばかり

ちゅう ちゅう ちゅう

しかたがないので まん中に

線を一本ひきました

お部屋が二つできたので

はい 仲直り ねずみさん

中学生の ねずみさん

「これどう？ いいでしょ？」シーン。

ゆみちゃんが言います。「ねこねこねこ

ちゃん、またねんね。」ヤッターその調子！

ねこねこねこちゃん

ゆみちゃんとせんせい

ねこねこねこちゃん

またねんね

せなかまるめて

しっぽもくるり

「こ」の字のお鼻が

かわいいな

ねこねこねこちゃん

またねんね

わたしはおこたで

おべんぎょう

「ね」の字と「こ」の字

ねこねこねこ

ね

「ねえ、これはどう？」シーン。じゃあ、

もう何でもいから書きなさい。

そうして二時間後にでき上がった詩集。清

書して、コピーして、皆でバチンとホチキス

でとめて。

ゆめ

ふくい夏

わたしのかおに

かめが一ぴきはしってきた

夏がたすけてと

いったそのとき

でんわがなった

でもそれは

でんわじゃなくて

めざましどけいだった

わたしのくつした

ファンベイストラん

わたしのくつした

に あなが

あいていると

おもうと

あいていないし

あいてないと
おもうときは
あいています
それは
あんまりおもしろ
いとおもいま
せん

うさぎ

えがわけいこ

あるひちいさな
うさぎがいました
だけどあのね
ちいさなうさぎは
おかあさんが
なくなりました。だけど
ちいさなうさぎは
ちいさな

ありをみつめました。
そしておとも
だちになりました。

わに 小一年 むなかたみやび

きょうわたしのへやに
わにがいました。
わたしがベッドからおきたとき、
わたしはきあーといいました。
そしたらわにが
「ごんにちは」といって
わたしはまた
きあーきあーといいました。
わにはこういいました。
「あなたはいつも
きあーきあーというから」

何も私が教えることないんだけどなあ、と
思いながら、職員室に引き上げる。見知らぬ
代行の先生が詩集を見て、「わたしのお馬は
おバカさん、だって？ バカバカバカと走り
ます、だって？ こ、こ、この子、て、て、

て、天才ですよ！

若い先生はコウフンして叫んでいたけれ
ど、小賢しい大人の詩が、どれだけ心を和ら
げてくれるというのだろう、「バカ」。

(歌人・アムステルダム補習校)

